

[成果情報名] 二期咲きラベンダーの有望系統「長崎 Lav1」、「長崎 Lav2」

[要約] 二期咲きラベンダー有望系統「長崎 Lav1」は「リトルマミー」より蕾の色が濃く、矮性である。有望系統「長崎 Lav2」は「リトルマミー」より早生性、矮性である。

[キーワード] ラベンダー、リトルマミー、早生性、矮性

[担当] 長崎県農林技術開発センター・農産園芸研究部門・花き・生物工学研究室

[連絡先] (代表) 0957-26-3330

[区分] 花き

[分類] 指導

[作成年度] 2016 年度

[背景・ねらい]

本県オリジナルの鉢物・苗物として、耐暑性、春秋の二期咲き性ラベンダー「城南1号」が2009年に商品化された(商品名:長崎ラベンダー)。しかし、「城南1号」は鉢物としては草丈が伸びやすくコンパクトに仕上げるのが難しい、出荷時の蕾の着色が薄い、やや晩生であるなどの問題がある。

そこで、「城南1号」より早生性、矮性、蕾の着色が濃い有望系統の選抜を開始し、これまでに「リトルマミー」(登録商標)を商品化している(2014年)。さらにシリーズ化を図るため、新たな有望系統を選抜する。

[成果の内容・特徴]

1. 系統「長崎 Lav1」は、2013年4月播種した「ハイデコードブルー」の実生から選抜した系統である。無加温栽培での平均開花日は5月27日で、「リトルマミー」より10日遅く(表1)、加温促成栽培での平均開花日は、「リトルマミー」より4日早い(表2)。株高は、「リトルマミー」より短く、矮性である(表2、3)。蕾の着色は、「リトルマミー」より濃い(写真1)。加温促成栽培後の切り戻し後の開花は「リトルマミー」より早い(表3)。
2. 系統「長崎 Lav2」は、2013年4月播種した「エレガンスパープル」の実生から選抜した系統である。無加温での平均開花は5月12日で、「リトルマミー」より5日早く(表1)、加温促成栽培での平均開花日は「リトルマミー」より9日早く、早生性である(表2)。株高は「リトルマミー」より短く、矮性である(表2、3)。加温促成栽培後の切り戻し後の開花は「リトルマミー」より早く、開花枝率も高い(表3)。蕾の着色は、「リトルマミー」と同程度かやや薄い(写真2)。

[成果の活用面・留意点]

1. 開花日は小花が開花した日をもって開花日とした。
2. 系統「長崎 Lav2」は開花後倒れやすい傾向がある。高温期の開花では蕾、小花の色が薄くなる。

[具体的データ]

表1 無加温ハウスでのラベンダー有望系統の開花特性(2015年)

系統・品種	開花始め	平均開花日	開花枝率
	月・日	月・日	／株 %
長崎Lav1	5月19日	5月27日	100
長崎Lav2	5月10日	5月12日	100
リトルマミー	5月17日	5月17日	100

耕種概要：挿し芽・2014年6月13日、鉢上げ7月11日3号ポット、
2015年2月11日4号ポット、無加温ハウス内栽培

表2 加温促成栽培での有望系統の開花特性(2016年)

系統・品種	平均開花日	株高	開花枝数	伸長枝数	開花枝率
	月・日	cm	／株 本	／株 本	／株 %
長崎Lav1	5月5日	16.0 a	12.2 a	12.2 a	100
長崎Lav2	5月1日	15.0 a	12.0 a	12.0 a	100
リトルマミー	5月10日	22.4 b	17.4 a	17.4 a	100

耕種概要：挿し芽・2015年6月3日、鉢上げ7月10日3号ポット、2016年2月10日4号ポット。

加温2月10日より(13℃)。ワイ化剤3回散布。

加温開始時より発蕾時まで夜間電照(白熱灯)5時間(22:00~3:00)

注1)株高：鉢の地表面から株の最長部までの高さ。

2)同列異符号間には5%水準で有意差あり(Tukey法)。

表3 加温促成栽培後の切り戻し栽培における開花特性(2016年)

系統・品種	平均開花日	株高	開花枝数	伸長枝数	開花枝率
	月・日	cm	／株 本	／株 本	／株 %
長崎Lav1	8月11日	30.0 a	12.6 ab	21.6 ab	58.3
長崎Lav2	8月10日	30.6 a	25.8 c	25.8 bc	100.0
リトルマミー	8月14日	35.2 b	18.2 b	28.6 c	63.6

耕種概要：表2と同。2016年5月30日切り戻し。

切り戻し時より夜間電照(白熱灯)5時間(22:00~3:00)

注1)同列異符号間には5%水準で有意差あり(Tukey法)。



写真1 左「リトルマミー」、右「長崎Lav1」 写真2 左「リトルマミー」、右「長崎Lav2」
(2016年4月30日撮影)

[その他]

研究課題名：ながさきオリジナル新品種開発推進事業

予算区分：県単

研究期間：2015~2017年度

研究担当者：諸岡淳司、竹邊丞市、岳田 司